

INTERVIEW：インタビュー

シンガーソングライター

岸谷 香 さん

今月のインタビューは、プリンセス プリンセスの元ボーカルであり、現在もソロ歌手としてパワフルに活動されている岸谷香さんです。颯爽と、かっこよく、プリプリにあこがれた世代のカリスマそのままで、刺激的なインタビューとなりました。音楽の原点、プリンセス プリンセス岸谷香誕生までの秘話、再結成にかけた思い、妻であり母でもある岸谷香さんの「ダイヤモンド」とは…など、どんなに時間をかけても聞ききれないことでいっぱいでした。岸谷さんのお話を聞いていると、インタビューの回答というより、熱い音楽を聴いているようで、その言葉のひとつひとつがとても美しく心に響きました。プリプリ世代の私たちにとって、夢のような時間でした。

(聞き手・構成：石原 修，町田 弘香，富田 寛之)



——音楽を始めたきっかけは、どんなところからだったのですか。

趣味というか、習い事の一環としてクラシックピアノをやっていたのが、一番最初の音楽です。

——バンドなどの活動を始めた時期ときっかけは何ですか。

通っていた学校が付属だったので、中学に上がった時に先輩が、私がピアノが弾けることを知っていて、先輩に「君は小学校のときにピアノを弾いていたから、キーボードを弾いてくれないか」と言われて、見学してみたら面白そうだったので。

——芸能界入りのきっかけはなんですか。

バンドとかやっていて、勉強もろくすっぽしていなくて、私は、付属の高校に行けなかったんですね。それで私立高校に1年間通ったんですけど、とにかく学校を辞めることばかり考えていたところに、後のプリンセス プリンセスのメンバー募集を見つけたことがきっかけです。

今となって振り返ると、あのときの大失敗、人生初めての挫折だったわけですね。電車の中で受験票を握りしめて、おいおい泣いちゃったような。家中が香の人生は大変だみたいな雰囲気になった挫折が、成功のものすごい鍵だった。あのまま付属の高校に上がって

いたら、オーディションに受かるうが、母はうんとは言わなかったと思うので、人生最大の挫折と思ったことが最高のチャンスだったんだと今は思いますね。

——オーディションに受かったときの、御両親の反応はいかがでした？

猛反対ですよ。私が「でもやっぱりやりたいかも」とか言っていたので、何日か話をしたんですよね。そのときに母が、「勉強は一晚やれば何とか一夜漬けで点数が取れるけど、音楽なんて才能のものは一晚徹夜で努力したって、次の日にいい点数は取れない、実を結ばない。そんな実を結ばないものやって、才能なんてあるわけないんだし、つらい思いをするだけだから、やめなさい」と。ずっと反対されて、そうだよなってその時は思うんです。

でも次の日になると、私が断ったらどうなるんだろうと思って。補欠が繰り上がるわけだよな、これを断ってグループがテレビとかで大成功したら、私は友達に「本当はあれ私だったんだよね」と言うのかなと思ったりして。「私が断ったからあの子がやっているだけで、本当はあれ私だったんだよね」って言っている様子が目に浮かんで、それが何てみっともないんだろうなと思ったんですよね。

だから私「やってみたい」って親にもそう言って説得をして。ぎりぎりのところで、母が「そんなに言うならやってみなさい」と。母もよくそう言ったかと、娘を持って初めて思います。私だったら絶対にうんと言わないだろうと（笑）。

——赤坂小町時代の活動はどのような感じでしたか。

おニャン子クラブがヒットしたときに、おニャン子クラブが楽器を持ったみたいな感じにしたかったんだなというのが、後から分かって、ちょっと無理だっただろうってみんなで言うていました。曲を与えられて、レコーディングして練習して、そんな感じで演奏できるようになったら、何となく小さいイベントとかやっていたんですけど、やりたかった事ってこういうことじゃなかった筈、みたいなことに気が付きだしたのは20歳くらい、それまでは疑いもなく一生懸命ただやっていて。

——活動についてメンバーの中で話し合ったりしたんですか。

もちろん話し合いました。そもそもどういうものをイメージして始めたのかということ話し合ったら、やっぱりみんなロックバンドのイメージだったので、まずは自分たちで曲を作ったり、詞を作ったりとか、服もこんなじゃないし、髪の毛もこんなじゃないし、全部違うねみたいな感じで、じゃあ、事務所とか辞めて、自分たちのやりたいようなことをしていけばいいんじゃないのということになったんですね。

——自分たちで作ろうって決めたからといって、素晴らしい歌がどんどんできてくるというのが、ちょっと信じられないのですが。

皆さんが知っていらっしゃる曲というのは、段階を踏んで、ああいうものができてきたわけで、いきなりあれができたわけではないんです。でも私は偶然ですけど、小学校のころから曲を作っていたんですね。ギターの子は、詩集みたいにノートに詞を書いていたんですって。別に作曲家になろうとか、作詞家になろうということではなくてやっていたので、じゃあ、曲は私が書くよ、詞は私が書くよみたいな感じで、そのあたりは、わり

とすんなりと。バンドのオーディションを受けたときも、私は自分で作った曲を歌ったんです。

——そうなんですか。

リルケの詩集が小学校のときに好きで、それに曲を付けようかと思ったけれど、曲を付けにくい文章だったので、ほとんどできなかった。でも、その中でも特に好きだった一編の詩にだけは、曲を付けようと努力した、ということもありましたし、チッチとサリーの詩集というのがあって、それはしゃべり言葉だったので曲が付けやすくて、それに曲を付けたりしていました。

——子どもの頃クラシックを習っていたことが作曲に影響しているようなことはありますか。

クラシックもポップスも結局ドレミファソラシドしかないし、白い鍵盤7つに黒い鍵盤が5つしか1オクターブの中にはない中でやっているものなので、クラシックの大好きな曲とかを弾いてみると、ポップスの言葉で言う「コード」が、クラシックだとコードとは言わないだけで、あるんだな、と。やっぱり音楽は、どのジャンルも一緒なんだなというのはすごく思っています。コードという考え方は、クラシックの中には全くないんですけども、手は知っている。頭は知らなかったけど、手はそれを知っていたんですね。だからポップスを弾いたときも手は弾ける。手が知っているというのは大きかったです。曲を作るときにクラシックで押さえたことのある音、やっぱりそれがもとになりますから。だから、子どものころにクラシックでしたことは全部私の作曲に結び付いていると思います。

——作った瞬間に、これは、はやりそうだなとか、私はすごい気に入ったんだけど、万人受けはしないだろうとか、そういう感じってありますか。

あります。

——当たりますか。

当たるときもあれば当たらないときもありますね。

子どものときというか、まだ経験が少ないときは、発表したいけれども発表する場がない。

だから、アイデアがたまっちゃって、もう引き出しの中がぱんぱんになっちゃって、発表するときにはいつでも、これは最高だよと思って発表できた。

それが、大人になってキャリアを積んでくると、聴いてくれる人はたくさんいるけど、発表するアイデアが乏しくなるとこう変わってくるわけですね。だんだん発表する場が増えてくるけど、アイデアはいつでもわいてくるわけでもない。吐き出す方が多くなって、あるときアイデアの方が少なくなってきた、というふうに変わってくると、今度は冷静に考えて、これはきっとみんな好きだろう、でもこれはまあ、一般受けはしないけど私は大好きだよとか、考えました。

——プリンセス プリンセスとして活動を始めて、いけるという感触があった瞬間はどんなときでしたか。

レコードよりライブを先行するような活動をしていたので、最初はとにかくライブをやって人を集めて、そこで人気が出てきたらレコードも売れてくるぞみたいな考えだったんですよ。なので、ライブは、1人が3人になり、3人が5人になりみたいな次元から始まり、ちょっとずつ増えていたところが、何がきっかけか、突然1けた違うみたいな日がやってきたわけですね。何かあったのかなみたいな感じで、「誰かが買い占めたんじゃないか」とか、いろいろなことを言っていたんですけど、そういう成功する階段が1段ずつじゃなくて、3段飛ばしみたいな瞬間があったんですよ。

人って不思議で、みんながいいねって言い出すと、そんなに興味がなかった人も急に興味がわいてきて、いいねと言っちゃうみたいなどころがあると思うんですけど、本当にある朝起きたら急にみんながいいね、いいねと言っていたみたいな感じで。

ライブがどんどん大きくなっていった、ライブハウスから渋谷公会堂が決まって、次は武道館というふうに、とんとんとんと大きくなっていったので、それはもうやったと思っていたね。

最初の武道館、追加も出して4日間やったんですけど、その後に『Diamonds』を出したんですよ。だから変な話、あそこに来ている人はみんな買うだろうって、

ライブに来ているから当然ね。なので、ある程度ヒットするのは当たり前みたいな。『Diamonds』がヒットしたのはうれしかったけど、衝撃的ではなかったですね。でもあんな、1位とかになっちゃったのは、ちょっと衝撃的でした。

——今『Diamonds』の話が出たんですが、歌詞の中の「ダイヤモンド」とは、自分の中の何か輝いている大切なものと思っているんですけど、岸谷さんの中では『Diamonds』って何ですか。

あの曲ができてから、かなり時間がたちますけど、どんどん変わってきているんですね。作った当時は、何かものすごく大きな、ダイヤモンドというぐらいだから、本当になかなか手に入らないような大きな幸せとか、例えばバンドが武道館をやったとか、そう簡単に体験できないようなすごいことを体験できた、それが自分の人生のダイヤモンドだと思っていたんです、プリンセスプリンセス以上のダイヤモンドは、もうこの先は出てこないだろうと。

あれだけ素晴らしい大きなものを持っているから十分、と思って解散をしたんですけど、その後色々な事、家庭を持ったりとか子どもができたりとか、そういうことも経験したわけですね。今またこうやって（再結成の際に）『Diamonds』をやったときに、みんなで言っていたのが、あの歌の真意は、日常どこにでもある小さいものがダイヤモンドなんだよ、ということじゃないかって。気が付かなければ気が付かないで過ごしていくんだけど、気が付こうと思って目をこらして生活していれば、小さなことがすごく輝いて見える。

例えば、子どもが健康なだけでも本当はダイヤモンドなわけじゃないですか。だけど健康が毎日続いていると当たり前になってしまって、健康だけしか取りえがないとか言って、「こら！」とか言って怒ったりもするわけで、そういう小さな何でもないことというのが、本当は一番輝いているダイヤモンドなんだというのが、震災や、家族や子どもを持つという経験をした後の、今回の再結成の活動で一番感じたことでした。特に仙台でライブをやったときは、もう本当に思い知らされたというか。

気が付かなければ気が付かないで過ごしていくんだけど、気が付こうと思って目をこらして生活していれば、小さなことがすごく輝いて見える。震災や、家族や子どもを持つという経験をした後の、今回の再結成の活動で一番感じたことでしたね。日常どこにでもある小さいものがダイヤモンドなんだよ、と。

岸谷 香



——震災後にプリンセス プリンセスを再結成されましたけれども、どのようなきっかけでメンバーが集まったのですか。

バンドのドラムの子から、みんな大丈夫ですかというようなメールが1週間ぐらいしてから送られてきました。震災の後。そのメールがきっかけだったと思うけど、5人集まれば1人でやるよりずっと大きな支援ができるというのが、分かってはいたんですけど、再結成ということは全く16年間意識をしてこなかったもので、できるのかなって。

でもいろいろなニュースを見たり、2人の子供と私と3人でリビングでテレビを付けっぱなしでニュースを見ながら寝て、この子たちだけでも守れるんだろうかというような危機感もありましたし。

非常に言葉を選ばないといけない言い方になりますけど、そのまま最悪の結末を迎えてしまった方がたくさんいるわけじゃないですか。それを思うと、事なきを得た者として何かしなければいけないんじゃないかというふうに、すごく思ったんですよね。だから本当に再結成ができるのかということを考えて、メンバーがやると言ったらできそうだった時点で、メンバーに話しました。

——実際に活動をされて、どのような印象を持たれましたか。人生で、また、バンドとしても、こんなに素晴らしい

活動ができたのは本当に幸せだと思いました。チャリティーというのは、欲がないわけですよ。もうけてやろうとか、利用してやろうという気持ちが存在しない。

チャリティーのためだけにみんな努力をするという清らかさというか。コンサートとか、テレビで歌うとか、そういう活動も、自分達のためにやっているわけじゃない。来年の自分達のためにやっていたら、そういうふうには見えなかったと思うんだけど、そうじゃないもののために頑張っている時、見ている人にもどこかが違って見えるんじゃないかなあ。あんなふうな拍手とかをもらったことがないというぐらい温かい、すごく素晴らしい気持ちのこもった拍手と声援をもらった気がします。最後は、こんなに大きなことができたのも、集まってくれたファンの人がチケットを買ってくれたからで、本当にみんなもありがとうという感じで、メンバーとファンの人たちが一緒にやり遂げたというすがすがしさがあ、それは本当に大きなもので、素晴らしかったです。

プロフィール きしたに・かおり

1967年生まれ。東京都出身。シンガーソングライター。1986年、プリンセス プリンセスのボーカルとしてデビュー。女性バンドとして初の日本武道館コンサートを行う。13年間にわたるバンド活動で、21枚のシングル、15枚のアルバムを発表し、観客動員数は190万人を記録。1996年にバンド解散後、ソロ活動を行い、多くのミュージシャンに楽曲を提供している。2012年には、東日本大震災復興支援としてプリンセス プリンセスを再結成し、同年末には紅白歌合戦にも出演した。